

## 干潟を生かした街づくり—韓国スンチョン市の取り組み—

佐藤正典（ゴカイ研究者）

2025年10月18～21日の3泊4日で韓国のスンチョン（順天）とプサン（釜山）に行ってきました。大阪のNPO法人「シニア自然大学校」が主催する「地球環境自然学講座」の受講生とスタッフ（合計23人、うち女性19人）の「自然観察会」（JTB委託の団体ツアー旅行）にガイド役として参加させていただきました。旅行プランのうち順天での干潟見学の内容は、私が旧知のホン・ジェサン先生（韓国インハ大学名誉教授）と相談しながら立案しました。

私が順天を訪れるのは4回目です。初めての訪問は、今から16年前の2009年でした。当時、日本では、有明海における諫早湾の干潟の閉め切り（1997年）による漁業への悪影響が顕在化していましたが、韓国の西岸では、さらに大規模な干拓事業が進行していました。そんな中で、韓国南西部の順天市は、「生態首都」を看板に掲げ、干潟を生かした町づくりを進めていました。鶴をはじめ多数の渡り鳥が飛来する順天湾の干潟（閉め切られた諫早湾の干潟とほぼ同じ面積）とその後背地（水田）を広く「環境保全地帯」に指定し、そこでの開発を禁じ、電柱の撤去や飲食店の移転を粘り強く実施したのです。その結果、自然観察のために順天市を訪れる観光客が著しく増えました（2009年の時点で、年間約300万人）。人々は、順天市が管理する「順天湾自然生態公園」の中で、干潟上部のヨシ原に設置された木道を歩きながら、干潟で活動しているムツゴロウやカニ類などを観察することができます。また定期的に運行されている船に乗って海から干潟や渡り鳥を観察することもできます。

この順天市において、2009年6月に、順天市後援の韓日合同シンポジウム「干潟の生物学」が開催され、日本から約50人の研究者が参加しました（市長が冒頭の挨拶をされた）。その後、私は、2010年と2013年にも順天に行き、ホン先生らと干潟で調査を行いました。順天湾の干潟の環境と生物相は、閉め切り前の諫早湾の干潟に大変よく似ていました。

久しぶりに訪れた順天湾の干潟は、昔と変わらぬ美しい姿でした（図1）。今回の旅行の参加者は大半が70歳以上の高齢者（最高齢は90歳）だったが、私の最初の訪問時と同じコース（ヨシ原の木道をゆっくり歩いた後（図2）、干潟を一望できる龍山の山頂まで登る往復約1時間半のコース）を全員が歩きました。ソウルから駆けつけたホン先生も、順天市の専門職員（鳥の専門家）と共に同行され、要所要所で、干潟や渡り鳥について解説して下さいました。JTBの現地ガイドさん（韓国人女性）の通訳のおかげで、韓国語の説明もよく理解できました。



図1. 順天湾の干潟とヨシ原（龍山からの展望）。  
2025年10月19日。



図2. 干潟上部のヨシ原内の木道。正面右手の山が「龍山」。2025年10月19日、Jae-Sang Hong 撮影。

その後、船上からの干潟観察（約30分）を行い、最後は、ビジターセンター内で順天市の担当者（私が前回の訪問でも会った人）に市の干潟保全政策についてお話いただきました。

鳥の専門家からは、鶴について、興味深い話を聞きました。「順天湾には、鹿児島県の出水市と同様に、多数のナベヅルが越冬のために飛来し、日中は、干潟の後背地の水田で採餌している。冬の水田の稲わらの下に生息する昆虫類はナベヅルの食べ物として非常に重要である。夜間は、干潟をねぐらとして利用している。ただし、水田に餌が少ない場合は、干潟の動物も食べている。順천시では、ナベヅルの生息環境を保全するために、干潟だけでなく後背地の水田も環境保護区に指定し、そこでは無農薬（または減農薬？）のお米を栽培している（図3）。」



図3. 順천시からいただいたお米（保護区の水田の有機栽培米）。

JTB が選定した順천시内の韓国料理店では、壁に順天湾のデザイン画が掲げられており（図4）、そのデザイン通りの料理がでてきました（図5）。泥干潟を模した甘いクリーム色（ナツメ？）または黒色（黒豆）のソース、夏のヨシ原の緑を模したニラ、そして本物のカニ（おそらくヒメヤマトオサガニ）の唐揚げの三点セットでした。



図4. 順천시内の料理店の壁を飾るデザイン画。2025年10月18日。



図5. 順천시内の2つの料理店で提供された夕食料理。(上)10月19日。(下)10月18日。

日本では、有明海にしか残っていない泥干潟の生態系が、今、崩壊の危機に瀕しています。その生態系の心臓部である諫早湾の干潟を一刻も早く復元することが必要だと思います。そのためにはどうしたらいいのか。順天湾では、市のレベルでの長期的な取り組みによって、干潟の豊かさが地元の街の誇りとして根付きつつあるように見えます。有明海でも、佐賀県の鹿島市では、「ガタリンピック」などを通して、長年、干潟を生かした街づくりを進めている。国境や県境を超えた市レベルの連携によって、突破口が開けないものでしょうか。